

ナショナルモニュメント

ミューアの森

—ジョン・ミューア記念公園—

此の樹、霊宿る樹
茂る谷、神々の館
高く巖然として永遠に

ジョン・メイスフィールド

英国詩家 1930～1967

て来る。かつてはブラックベアー（黒熊）、グリズリイベアー（灰色の熊）、クーガー（アメリカライオン）、穴熊、エルク（大カモシカ）なども生息していたのだがサンフランシスコの文明圏内に入ってからは惜しいことに絶滅してしまった。

レッドウッドの巨木は開拓者がやって来るまで沿岸地方の森林の王者だった。土地のアメリカインディアンは西洋人が発見する当の昔から知ってはいたが、海岸線の陽当りの良い住み易い土地があったので無理に森の中に住もうとはしなかった。

レッドウッドと西洋人とが初めて出会ったのは、ガスバル・デ・ポルトラがキリストとスペインの栄光の名のもとに、サンディエゴから北へ探検した時だった。スペイン帝国の勢力が衰えてきた1769年、クレスピ神父はモンレー湾の近くに未知の大木を見つけ、「…非常に高く……幹の色は赤い……その色からパロ・コロラド（赤い木）と名づけた」と記した。

1848年カリフォルニアに金が発見され、世に言う、ゴールドラッシュとなり、人口は激増した。金坑に住宅にとレッドウッドの用途は限り無く、次々と伐採された。まず、サンフランシスコ近郷の森、次にマリーン郡の、そして北部沿岸地方の容易に人手が届く森は総て姿を消した。この森が今尚残っているのは、唯不便な所であったからにすぎない。所有者が替るたびに伐採されそうになりながら、マリーン郡に住んだこの森の前の所有者、ケント氏の手へ渡った。ケント氏はこのレッドウッドの森の永久保存を考えて1908年に連邦政府へ寄贈し人々のレクリエーション地として提供した。その寄付の条件は米国の作家にして博物学者、また自然の保護に貢献のあったジョン・ミューア（John Muir 1838-1914）の功績を記念してその名を附すことだけであった。これがミューアの森（Muir Woods）由来である。

米国内務省国立公園局

— 圖の零理ノ一ツミ・ノミ —

森のノ一ツミ

ノミツミニキルチニシ

英国詩家 1930~1967

ノミツミニキルチニシ

高く厳然として永遠に

茂る谷、神々の館

此の樹、霊宿る樹



俗塵を離れて高々とそびえるレッドウッド（アメリカ杉）の大自然に親しもう。木陰の静けさと平和は訪ねる者を魅きつけて放さないことだろう。

峡谷にあつてレッドウッドは樹齡二千年の長きを数えるが、世界に散在する化石の語るところによると、地上に出現したのは何と一億四千万年も昔のことである。気温帯が移り変るにつれユーラシアと北アメリカの大陸に、この種の樹が現れては消えた。フランス、ドイツ、日本そしてスピッツバーゲンにさえ君臨していたのだ。この大樹の分布範囲は地球の気温が下り、乾燥するにつれて五千万年前頃から縮少し始めたが、氷河期までは、それでもカリフォルニア州全域に繁茂していた。しかし今日ではオレゴン州西南の一角からカリフォルニアのモンレー郡に至る沿岸地方にしか見られなくなった。レッドウッドと同種のセコイアの巨木もシエラネバタ山脈西側の山腹に多く残り、太古の面影をほうふつとさせている。

カリフォルニアの臨海地方は冬の雨期に加えて夏は霧が濃く、年中レッドウッドの成長に欠かせない水気が豊富であるが、内陸では夏の乾燥が激しく、葉からどんどん水分が蒸発してしまい根からの供給が間に合わず生存できない。

レッドウッドの森はめったなことでは大きな山火事にならない。炭化した幹が所々に見られるがそれも110年も前のものだ。レッドウッドは火気や昆虫、（真）菌類に対する抵抗力においてどの樹木も比較にならないほど強い。また、水気が多く他の針葉樹に見られるような可燃性の樹脂がない。故に樹齡は長く、少なくとも数世紀をも生き、高さも100メートル以上になる。北部カリフォルニアに見られる巨木は何と110メートルを越えて、樹木としては最も高いものだろう。

レッドウッドの森と言つても外の植物がない訳ではない。赤楊（ハンノキ）が小川の畔に列をつくつて白い枝を渡し、樅は林間の木陰に腰を据え、石楠花（シクナゲ）は陽光を求め曲りくねった枝を張っている。苔や地衣、それに腰までもある羊歯（シダ）類も太古の自然に緑を添えて美しい。

森の住人は動物に野鳥と魚、リスは地面の穴から顔を出し頭上の枝を走る。鹿は森の王者、春には親子連れでほほえましい。野鳥はオレゴンジュンコ（雷鳥）、ミソサザイ、それにツグミ。木の実や虫を捜し求めガサゴソと忙しい。魚は冬のスティールヘッド（上りマス）やシルバーサーモン（サケ）。秋の終りから春の初めは雨期で谷間に水が溢れ上流の生れ故郷へ太平洋から遙々と卵を産みにやつ

